コレクションによる小企画「新収蔵＆特別公開｜ピエール・ボナール《プロヴァンス風景》」
会期：2022年3月18日－5月8日｜会場：美術館ギャラリー4［2階］

ボナール《プロヴァンス風景》(1932)を見始める(前編)

平倉圭［横浜国立大学准教授］

「????」というのが絵を見たときの最初の印象だ。何を描いているのかがわからない。1時間、2時間、見続ける。それでもわからない。

風景が描かれていることは分かる。豊かな木々がある。細胞状に仕切られて輝く空は、――あえて解釈すれば背後から月に照らされたうろこ雲のようだ。左下には人物のように見える色斑がある(大人が2人、子供が2人、3人…)。それでも、絵が「何を」描こうとしているかがわからない。――モチーフが分からないということではない。つかみどころがない。これは文字通り、つかむためのフレームが絵の中にないということだ。

おそらく。

そう考えながら、同じ部屋のピカソ《ラ・ガループの海水浴場》(1955年)に目を向ける。それはとてもはっきりしている。ボナールと同じように、空間の浅さと混色されない絵具の生(なま)っぽさがある南仏の光景だが、ピカソにはつかみどころ＝事物と事物、空間と空間を仕切るフレームがある。フレームは、黒い線で描かれている。

ボナールに振り返る。黒絵具の扱いを見てみよう。――特集の資料展示に置かれた記事の中で、画家の岡鹿之助は「ボナールは［…］部厚く絵具を重ねるが、画面が仕上げに近づくにつれて、カサカサと非常にかたねりの絵具をこすり付ける様においてゆく」と書いていた[1]。画家の言葉は具体的で面白い。画布に目を近づけると、たしかに、局所的に現れる厚塗りのテクスチャーの上をかするように、黒絵具が擦りつけられている。影というには生っぽすぎるが、つかむためには煙のようでありすぎる黒が、空の上［図1］や、壁の隙間、木の中にある。

対比されて、ぬめっと白っぽく混色した平らな領域があちこちに広がる。中央左寄りの大きな木の幹――それはしかし幹なのだろうか？［図2］幹らしき灰白色の筋は半透明で、それゆえうまくつかめない。事物の表面は絵具化した世界の中で置き換えられている。事物は展性をもち、よく延ばすと透ける。世界はいたるところで乳化している。

右下の黄橙色の木々や、左端手前で見切れた紫陽花(あじさい)のようなかたちの中には、画家の手の動きと一致した物質感の強

ピエール・ボナール
《プロヴァンス風景》1932年、
東京国立近代美術館蔵

い筆致がある。筆致は画面の領域ごとに変えられている。不統一な筆致の混成こそが目指されているようだ。

少し離れてみる。絵に目が慣れてくると、色はばらばらに踊りだすように感じられる。どうしてこんなに生っぽい色が使われているのだろう?　中央の木に飛び交うビリジアン。画面の臍(へそ)をなす位置に唐突に塗られたカーマイン(これも幹だろうか?)。黄とオレンジも強い。生っぽい色は周囲になじまない代わりに――なじむことで絵画の中に描写的な奥行きを作らない代わりに――、かえって離れた場所にある色と響き合い、空間を作る。その響き合いの感覚は、画面の局所に位置づけられないという意味で非視覚的で、むしろ空間を満たす「音」に近い。

特集展示の説明文によると、ピカソはボナールの絵を「極度にオーケストラのような表面an extremely orchestrated surface」と呼んだらしい[2]。空の青をふたたび見る。音楽の喩を用いたピカソの真意はわからないが、この空の描写は、私にとってたしかに耳に「くる」。実際には何も聞こえないのに、画面全体を満たす反響に鼓膜が圧(お)されているように感じられる。そこをくぐるように、ふたたび画面の中に入る。

左右で見切れる画面は、比較的小さいながらも環境environmentであり、私を取り囲む。見る私はそこで、かすられ、延ばされる、絵具でできた世界の響きに着水する。

夜は明るく暗い。そう言葉で書くことができるように、絵具で夜を描くことができ、それは現実の夜とも、現実の夜の視覚的感覚とも関わりなく、絵具的現実の中で変形し延展される。光は色になり、昼と夜は区別されず、空はかすられ、木々は透けて乳化し、人はいくつかの着色された液体の偶然的布置に変わる。それらが響く。――つかむための手指はもはやなく、物に溶けた目と色に開かれた耳が画布の上でふるえる。

もう少し見ないと。

図1：ボナール
《プロヴァンス風景》(部分)

図2：ボナール
《プロヴァンス風景》(部分)

［註］

1　岡鹿之助「ボナアルの色」『アトリエ』249号、1947年6月、13頁。傍点原文。旧字・旧表記は現代表記に改めた。

2　以下で伝えられる言葉。Françoise Gilot and Carlton Lake, *Life with Picasso*, Virago, 1990, p. 255.

会場風景｜撮影：大谷一郎
右：パブロ・ピカソ
《ラ・ガループの海水浴場》
1955年、
東京国立近代美術館蔵